
ディベルティメント 二次元世界への侵入

道草寄道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイベルテイメント 二次元世界への侵入

【Nコード】

N4808N

【作者名】

道草寄道

【あらすじ】

今巷で話題沸騰のオンラインRPG『デイベルテイメント』。一週間、ある目的の下で、不眠不休でキャラクターを限界レベルにまで育て上げた少年・氷野晶は、居候であるリン・マコミックと共に、突然光りだしたPCの画面に吸い込まれ、『デイベルテイメント』の世界に飛ばされてしまい――

序章（前書き）

勢い半分、ノリ半分で書いてみました。

文章はちまちまと改変していくつもりです。

序章

氷野家・和室

「ここに、今、巷で——まあ巷ちまたって言っても、ゲームを嗜む人間に限られる巷だけど、その巷で話題沸騰、人気爆発のオンラインRPGゲームのソフトがある」

軽いウェーブのかかった黒髪をした少年・氷野晶ひのあきらは、鞆の中からノートパソコンを取り出し、それを炬燵こたつの上に置いた。
氷野と向かい合う形で畳たたみの上に腰を下ろしている金髪碧眼きんぱつへきがんの少女・リン＝マコーミックは、みかんの皮を剥むく作業に集中しながら、氷野の話に耳を傾ける。

「今、非常に忙しいんだけど」

「まあ、いいじゃないか。人の話なら、作業をしていても聞くことは出来るだろう？」

アキラはリンの都合に構うことなく、話し始めた。

「さて、このゲームについてだが」

「あんたが好むようなゲームなんて、察しがつくわよ」

リンはみかんの皮を丁寧ていねいに剥きながら、溜息を吐いた。

「差し詰め、奇妙な噂やら——非常識な情報が含まれているんでしょ？」

「正解。流石は居候。伊達に長年一つ屋根の下で生活を共にはしていないな、うん」

氷野は大袈裟に頷いて見せた。

「紛うことなくその通り。このゲームをプレイする際に、ある『条件』を満たすことね……。なんと！ このゲームをプレイしている人間は、このゲームの世界に吸い込まれてしまうらしい！ ふふ、いやはや、なんともまあ都市伝説さながらな、正に根も葉もないような噂なんだけど——しかし、考え方を変えれば、視点をずらしてみれば、このゲームの世界——誰もが羨み、誰もが望む、前人未踏の二次元の世界に、たったそれだけのことで侵入し、生活することが出来る。理想的なことに、非常識的なことに、非現実的なことに！ 人工的な架空の世界に、干渉できるんだよ！ これはもう、人類の夢試してみるだけの価値はあるだろう！ 否、これを試さずして何を試すという！」

ばんっ！ と両手で炬燵を叩いて、興奮状態の氷野は体を乗り出した。

作業を邪魔されたようで不快に思ったリンは、上目遣いで氷野を睨んだ。

「……。そんな無表情で熱弁されても、あたしはゲームとか苦手だから、よく分かんないよ。後、みかんの皮を剥いている最中に、炬燵を思いっきり叩かないで。腹立つ」

リンは不機嫌そうな口調でそう述べると、みかんの皮を剥く作業に戻った。

氷野はわざとらしく咳払いをし、元の姿勢に戻った。

「しかし、残念ながら、このゲームソフトを手に入れ、やりこむこと早一週間……。睡眠を除いての規則的で常識的な生活習

慣を最低限ながらも守りながら、このゲームをプレイしていたわけだけど………」

「ああ、だからここ暫く、あんたの部屋だけ昼夜問わずで明るかったのね。キーボードを叩く音、近所迷惑とまではいかないにしても、同居人としては酷く五月蠅くて、非常に迷惑だったわ。まあ、居候の身だから、言える立場でもないんだけど」

「それについては謝罪する。すまなかった。けどそのおかげで、レベル200になったよ………」

喜ぶべき成果なのか、悲しむべき成果なのか、氷野にも判断しかねる。

「おかげで、すこぶる寝不足だけどね………」

氷野の目の下を見ると、真っ黒な隈が出来ている。

本当に、一睡もせずに、ゲームをプレイし続けた証拠だ。

リンはそれを確認すると、呆れたと言わんばかりの溜息を吐いた。

「はあ………祝えるほどのことじゃないし、そもそも祝う必要さえないことだけど、まあ一応、おめでとう。その無駄な時間の積み重ねに侮蔑の意を表して、この言葉を送るわ。あなたは既に、立派な廃人よ」

そんな称号、いらない。

アキラはそう思ったが、しかし事実、自分がその称号に相応なほどのゲームプレイをしたわけなのだから、反論は出来ない。

「しかし、条件は未だ満たせていない………」

「相当な長時間プレイでもない限り、無理なんじゃない？」

心底どうでもよさそうに、呆れた口調でそう言った。

「今のところ、解決の糸口は見つかっていない」

「解決ってわけじゃないと思うけど——そうね、とりあえず、そのゲームをやってみせてよ」

リンはそう言うのと、みかんを一房口ひょうぐちに放り、幸せそうに噛み締めた。

ゲームの世界に吸い込まれることを決して信じているわけではないが、しかし、そんな噂が立つほどのゲームの内容には、少なからず興味がある。

氷野は炬燵の上に準備しておいたノートパソコンの電源を入れた。

「これが、それだ」

氷野はノートパソコンの画面をリンの方へ向けて、指差した。

「これが、それね」

氷野の指差す方に、リンは目を遣った。

そこには、『ディベルティメント関係』と書かれたフォルダの中に、『ディベルティメント』と書かれたソフトが入っている。

「起動させてみてよ」

みかんをゆっくりとじつくりと一房ずつ食べながら、リンはそう言った。

氷野は欠伸あくびを漏らし、『ディベルティメント』のソフトにカーソルを当てて、ダブルクリックした。

「・・・・・・・・あれ？」

ダブルクリックしてから数秒後、氷野は思わず、首を捻^{ひね}った。

「何が『あれ』？』なの？」

「そこまで猫を被った言い方はしてないけど・・・・・・・・いや、いつもならここで『ようこそ！ デイベルティメントへ！』って歓迎の言葉が出てくるんだけど、画面が真っ暗なまま——っ！」

「ちょ、氷野！ 何か画面が光り出したっ！」

『デイベルティメント』を起動し、画面が真っ暗になってから十秒程が経過すると、ノートパソコンの画面が突然、光出した。

氷野もリンも目を丸くし、その場で固まってしまった。

氷野の方は「待ってました！」と言わんばかりに嬉しそうだが、リンは何が起きているのか理解出来ず、心底驚いている様子だ。

そしてその直後、二人の姿は氷野家の和室から消えていた。

序章（後書き）

『ディベルテイメント』序章を読んでくださり、ありがとうございます。
ます。

誤字脱字がありましたら、お手数ですがご報告お願いします。

〈第一章〉 順応性が高いお二人（前書き）

さあ、第一章の始まり始まり。

第二章 順応性が高いお二人

プレイヤールーム

目を覚ますと、居心地の良い氷野家の居間は、無駄に広い洋風な空間と化していた。

氷野はぎこちなく首を回し、周囲を見渡す。

この空間には、見覚えがある。

確か——そう、プレイヤールームだ。

新規作成されたキャラクターがまず最初に召喚される、いわば全プレイヤー共通のスタート地点。

しかし——どうして、ゲームの世界にある空間に、自身が存在しているのだろうか？

否、それは最早、愚問だろう。

何せ、自分は、それを望んで、このゲームを——『ディベリテイメント』をプレイし続けたのだから。

氷野はスタンドミラーで自身の姿を確認した。

普通なら驚くべきことなのだろうが、しかし氷野は、自身の姿が、一週間、不眠不休で育て上げた『アキラ』になっただけでも、別段、驚きはしなかった。

むしろ、嬉しそうに、自身の姿を眺めた。

しかし——違う。

アキラは自身の様子を確認し、目を疑った。

確かに、これは自身が廃人プレイの末に育てた上げた『アキラ』

そのものだが――

「レベル、1・・・・・・？」

自身の頭上に浮かび上がるゲージを見て、アキラは愕然とした。能力値も、装備品も、レベルも、初期の状態に戻ってしまっている。

長時間一睡もすることなくこつこつと上げてきたレベルも、体得してきた様々な特技も魔法も、苦勞して手に入れた『妖刀シリーズ』も、消えてしまっている。

友達リストに載っていたキャラクターの名前も無くなっているし、プレイヤールームの隅にある銀行に保管しておいた道具もゴールドも、全部消えてしまっている。

「絶望だ・・・・・・一週間の消失・・・・・・」

アキラは突然、全身の力が抜け、膝から崩れ落ち、床に手をついて項垂れた。

力と共に生気が抜け落ち、さながらこの世の最期を目の前にしたかのような表情だ。

これまでの努力が、全て、無になった。

（一週間――168時間か・・・・・・）

この怒りを、この悲しみを、どこにぶつけようか？

アキラは拳を強く握り締め、深い溜息を吐いた。

掌に爪が深く喰いこんでいるにも関わらず、掌から痛みを微塵も感じなかったのも、もしかしたらこれは夢ではないのだろうか、一瞬、淡い期待を持った。

しかし、自身の隣に横たわっているキャラクターを見て、その期待は消え去った。

「・・・・・・・・まさか、ね」

隣に横たわるキャラクターに目を遣って、頬を強張らせる。

白いマント、水晶球の嵌め込まれた木の杖————白魔術師だ。

回復魔術や援護魔術を得意とするが、戦闘には不向き。

しかし、パーティでの狩りでは必須の職業。

そして、金髪碧眼————リンⅡマコーミックそのもの。

このゲームでは、キャラクターを新規作成する際、自分の好みに合わせて、容姿を変更することが出来る。

殆どほとんどのプレイヤーは、己が理想とする容姿、もしくはネタに走って作成するが、アキラの場合は、プレイヤーである『氷野晶』の容姿に合わせて作成されている。

「おい、起きろ」

アキラは横たわっているリンの小さな肩を揺すった。

「・・・・・・・・返事が無い。ただの」

「生きてるじゃないか」

リンは眠そうに目を擦りながら体を起こし、自分の様子を観察し始めた。

「ふーん・・・・・・・・なるほどね。本当に、吸い込まれちゃったわけか。そして、これが、この姿が、この世界での『私』というわ

けね。あんたは自分のキャラクターがいたから自動的にそのキャラクターになったわけだけど、あたしに関しては何も作られていなかったから、適当にランダムに職業が選択されて、容姿は限りなくあたしに合わせて作成されたわけね。——いえ、画面に吸い込まれ、P Cの世界に存在していると仮定すると、あたしに合わせて作成したと言うより、あたしそのものがキャラクターと化したのかしら？ まあ、どっちでもいいけど。さて、名前は——キャラクター名は『リン』ね……。まあ、変な名前をつけられるよりは幾分かましかな」

「呑み込み早いな、ほんと……………」

リンの順応性の高さ、アキラは素直に感心した。
しかし、常に冷静を保っているリンが、混乱し動揺し、慌てふためく様子は、想像し難い。

「こうなってしまった以上、一刻も早くこの世界から脱出して、炬燵の上に残したままのみかんを食べないと」

「みかんばかりだよな、ほんと」

リンの食い意地の高さに、アキラは素直に呆れた。

「それで、氷野——いえ、アキラ。これからどうすればいいの？」

リンは近くの椅子に腰を下ろして、机に肘をついた。
アキラはその場で腕を組み、神妙な表情で考え始めた。

「そうだな……………取り敢えず、まずは死なないことかな」

アキラは指を折りながら、語り始めた。

「そうね。いくらゲームの世界だからと言って、死ぬのはやっぱり怖いし」

「次に、レベルを上げないと。装備も、特技も、魔術も、しっかりと揃えないと、先には進めないし」

「死なない為にも、進む為にもね」

「そして、この世界からの脱出法——おそらくは、物語の完結だろうね。その辺だと、ぼくは既にゲームをクリアしたから、問題は無いだろう。まあ、脱出出来ようが出来まいが、ぼくはどっちでもいいんだけど……」

「あんたが良くても、あたしが良くないのよ」

「さいですか」

アキラは自身の意見を語り終えると、予めプレイヤールームの銀行に備わっている、体力を回復させるアイテムである『ポーション』を五つ引き出し、袋に仕舞った。

リンにも同様のことをさせ、冒険の準備を整えた。

(おかしいな……)

もう一度辺りを見渡して、アキラは疑問に思う。

「どうしたの、アキラ？」

「うん？　——いや、なんでもない。それじゃあ、まずは村に出よう。このプレイヤールームを出ると、最初の村である『リスト村』につくはずだから」

「そうね。頼りにしてるわ」

「棒読みで言われてもねえ……」

アキラはリンを連れて、プレイヤールームを後にした。

〈第一章〉 順応性が高いお二人（後書き）

『ディベルテイメント』第一章を読んで頂き、ありがとうございます。

誤字脱字、その他エトセトラとありましたら、お手数ながらご報告
願います。

考え過ぎるには材料が足りなさ過ぎる(前書き)

まあ、考え過ぎるのもほどほどにと言うことです。

考え過ぎるには材料が足りなさ過ぎる

（リスト村）

これからぼくが語ることは、飽く迄も推測の域でしかない。

何せ、それを証明できるだけの証拠も材料も経験も過去も、何一つ、手元にはないのだから。

しかし、念の為と言うか、自己満足と言うか——否、混乱した我が脳内を、ある程度整理するべく、こうして語ることにした。

まず、プレイヤールームで感じた違和感の正体についてだ。

これは、小さな木造の民家が並ぶ田舎村ことリスト村に到着して暫くして、ようやく気付いたことだ。

ネットで繋がれたオンラインRPGゲームであるはずのこの世界——そして、全ての新規作成されたキャラクターが集まるはずのプレイヤールームに、何故かぼくとリンしか存在しなかった理由。普通なら——プレイヤールームががらに空くはずが、ないのだ。

さて、それでは一体、何故、プレイヤールームに、ぼくとリンしかいなかったのか？

それは——この世界が、ぼくが一週間を費やして廃人プレイをした『ディベルティメント』の世界とは、まるで異なっているからだと、ぼくは考える。

マニュアルどおりにログインすれば、極極普通の『ディベルティメント』の世界に入り、遊ぶことが出来る。

しかし、この世界——こちら側の『ディベルティメント』の

世界は、あの噂のとおり、普通のログインではなく、ある条件を満たし、画面が光りだすことによって、インすることが出来る。

その条件は未だ定かではないが、暫く冒険をすれば、おのずと真実は見えてくるだろう。

——否、その『条件』を知ることが出来ない限り、もしかしたら、リンを現実世界に帰すことは不可能になるかもしれないのだ。ぼくはリンを巻き込んだ償いを果たすべく、一刻も早く、その『条件』を知らなければならない。

あの時——ノートパソコンの画面が光りだしたときは、『条件』を満たした感動に酔い、表情にまで出してしまったが。

余談だが、何故リンにあの話題を持ち出したのかと言えば、無論、ぼくより頭の良いリンならば、何か違う観点から『条件』を満たす方法を導いてくれるかもしれない、と思ったからだ。

今思えば、愚かな考えだった。

自分の都合に、他人を巻き込んで。

最悪だ……最低だ。

——まあ、後悔し卑下するのも、後にしよう。

さて、この世界でまず最優先すべきことは——この世界での生活を望まないリンを、一刻も早く、一秒でも早く、元の世界に帰すためにも、滞ることなくさくさくと物語を進めることだ。

不可抗力とは言えど、自身の都合に巻き込んでしまったのには違いないのだ。

一度はクリアした『デイベルティメント』だ。

二度クリアすることくらい、容易いだろう。

ふと、隣を歩いているリンの表情を窺った。

普段どおり落ち着いていて、隙一つ内ほどの冷静さだが——

どこか、不安げだ。

さて、閑話休題。

続いて、もう一つの違和感の正体について、語らせて貰おう。

これは、リスト村の中を見渡したときに感じた違和感だ。

確かに、普通の『ディベルテイメント』の世界にあるリスト村と、こちらのリスト村との構造は、同じだ。

武器店や道具屋、民家の配置も同じだ。

しかし、あちらと違って、こちらのリスト村は——否、おそらく、この世界にいる全てのNPCは……

「どうしたの？」

ぼくが思考を張り巡らせるのに夢中になっていると、リンが下から顔を覗かせ、そう問うてきた。

「いや、ちょっと、考え事をだな……」

「珍しいわね、あんたが考えるだなんて」

喋るたびに毒を吐くのは、相変わらず。

この調子を、いつまでも続けて欲しい。

願わくば、最後まで。

「ぼくだって、考え事くらいするよ。ましてや、この状況だし」

さて、気分転換と言うことで、所持金をチェックしてみた。

アキラ『1000G』

リン『1000G』

二人合わせて、『2000G』

リスト村の住人からの情報収集を優先した為、まだ買物はしていない。

まあ、とは言っても、知っていることばかりだったが。

「まず、これからについてだけ……そうだな。リンはまず、回復魔術を覚えないとね」

村の中を歩きながら、ぼくは人差し指を立てて、そう提案した。

「もしかして、村の周りにいる雑魚を相手にレベル上げ……
・？」

リンはあからさまに嫌そうな顔をした。

子供が嫌いな食べ物を目の前にしたときと同じ表情だ。

こういう、内職のような、こつこつとした作業が苦手なリンにとって、この作業の繰り返しは辛いことだろう。

まあ、我慢して貰うけどね。

今は、我儘を言っている場合でも、それに付き合っている場合でもない。

これも、リンの為なのだ。

「そうなるね。金稼ぎと経験値稼ぎはしてこつこつながらもおか
ない」

願わくば、仲間も集めていきたいところだが——そうになると、ぼくらと同じ『条件』を満たした人間を、探す必要がある。

NPCが仲間になる可能性は考え難い。

確かに、この『ディベルティメント』の世界のNPCは、普通の

『ディベルティメント』の世界に存在するNPCとは大分違うが――いくらなんでも、NPCがプレイヤーの仲間になる可能性は、低いだろう。

物語の途中で、共通した目的の下で、ゲストのような形で仲間になるNPCはいるが、最初から最後まで共に冒険をしてくれるNPCは、いないはずだ。

しかし――そうになると、少々厄介だ。

おそらく、今のぼくは、苦い表情をしているだろう。

この世界に『条件』を満たして見事侵入成功した人間を探し出す――つまるところ『侵入者』を探し出すわけなのだが、先程のプレイヤールーム、続いてこのリスト村を見る限り、そのプレイヤーの数は、少ない。

――否、ぼくら以外には、存在しないのかもしれない。

しかし、下方的な意見は控えることにしよう。

絶望より、希望の方が断然良いのだから。

もしかしたら他の場所に固まっているのかもしれないし、はたまに『条件』を満たしてこの世界に飛ばされてきたキャラクター同士でギルドでも立ち上げているのかもしれない。

まあ、言った先からんだけど……あまり期待はしない方がいいかもしれない。

元の『ディベルティメント』の世界に比べて、こちらの世界をプレイしている人間は、『条件』が定かではない以上、この上なく少ないはずなのだから。

――否、もしかしたら、その『条件』を解明したプレイヤーがいるかもしれない。

まあ、そのようなプレイヤーに出会えることを願って、冒険をする

ことにしよう。

よし、思考終了。

脳の体操はこのくらいにして、次は体の体操をすることにしよう。

ぼくは早速、リンと共にレベル上げをするべく、リスト村を出た。

——その前に、備えあれば憂いなしということで、体力回復アイテム『ポーション』を買っておこう。

『アキラ』 レベル1

職業・・・剣士

武器・・・木の剣

防具・・・木の盾

『リン』 レベル1

職業・・・白魔術師

武器・・・木の杖

防具・・・安物の指輪

考え過ぎるには材料が足りなさ過ぎる（後書き）

『ディベルテイメント』を読んで下さり、ありがとうございます。
誤字脱字、その他ありましたら、お手数ですが、ご報告お願いします。

地道な作業の繰り返し（前書き）

ようやく血湧き肉踊る戦闘——しかし、残念ながら、激戦でも苦戦でもなく、ただの長時間に亘る作業………
テンションも雰囲気もへったくれない、ただの作業シーンです。
………すみません。

地道な作業の繰り返し

リスト村周辺

アキラとリンはリスト村を出ると、眼前に広がる景色に感動した。果てなく澄み渡る青空、さんさん燦燦と照り輝く太陽、かんまん緩慢に移動する雲、風に靡く草原——地球でも滅多に見られないだろう、鮮やかな景色だ。

これが、アキラの求めていた、アキラの望んでいた、理想の世界。アキラは大きく深呼吸をして、新鮮な空気を吸い込んだ。

「この世界の空気の方が、現実の世界より美味しいわね」

リンは大きく息を吸い込み、溜め込んだ息を一気に吐き出して、そう感想を述べた。

『ぷちスライムが現れた!』

リンがこの世界の環境に感動していると、くさむら叢の陰から小さなスライムが出現した。

「……可愛い」

リンはつい、相手がモンスターであることを忘れ、手で触れてしまいそうになる。

アキラはすぐにその手を掴んで、もう片方の手でリンの頭を小突いた。

「言っとくけど、今のレベルだと、触っただけでも1ダメージは喰らうからな？　つか、小さいもの好きも程々にしてくれよ……」

小さいもの＋可愛いもの＝リンの大好物

「む……それでも触りたい」

『ぷちスライムを倒しました！』

アキラはまるで子供のようなリンの態度に溜息を吐いて、出現したぷちスライムを木の剣で思い切りぶん殴った。

ぷちスライムは空気が抜けたように縮み、その場から消えていった。

「————あっ！　何で触る前に倒しちゃうのよ！」

リンは珍しく、感情を表情に出している。
いつものリンからは、到底想像のつかないことだ。

『ぷちスライムが現れた！』

「無駄にダメージを喰らいたくないんだよ」

「けちっ！」

『ぷちスライムを倒した！』

「————あっ！　また！　一体くらい触ってもいいじゃん！」

「その一体が命取りなんだよ。特に、今のレベルの白魔術師だと、体力は多くても、防御力は少ないからね。ぷちスライムが相手と言

えど、油断大敵『ぷちスライムが現れた!』ふん! 『ぷちスライムを倒した!』だよ」

「喋ってる間に、また一体……」

ぷちスライムが一体倒される度に、リンの気分が下向いていく。小さくて可愛いものが大好きなリンにとって、これは少々、気の滅入る作業だろう。

「取り敢えず、白魔術師『ぷちスライムが現れた!』とうっ!

『ぷちスライムを倒した!』は、ソロでの戦闘には不向きだからね。暫くは、こう『ぷちスライムが現れた!』そいっ! 『ぷちスライムを倒した!』して『レベルアップ!』ぼく『アキラはレベル2になった!』と『アキラは特技・瞑想を覚えた!』共に『アキラはポーションを拾った!』狩りをして、レベルを上げないと」

「ぷちスライムの出現率が、結構高いわね……おかげで、あんたが何を言っているのか、いまいち分からなかったわ……」

「兎にも角にも、もう『ぷちスライムが現れた!』ていっ! 『ぷちスライムを倒した!』少しレベルを『レベルアップ!』上げ『リンはレベル2になった!』よう『リンは白魔術・チュを覚えた!』ってことだよ」

「気が長くなるわね。後、話すときは戦闘を控えた方がいいわ。腹が立つ」

『ぷちスライムが五体現れた!』

「おいおい……五体はきついぞ」

アキラは苦虫を噛み潰したような表情で、ぷちスライムたちを見た。

どのぷちスライムも、殺る気満々な表情をしている。
ディベルティメントのマスコットキャラクター的な役割を担っているモンスターだとは、到底思えないほどの殺気だ。

「頑張って！」

リンはその表情と雰囲気から危険を察知したのか、いつの間にか遠くに離れていた。

瞬間移動の魔術でも体得したのだろうか？ まさに電光石火だな。そう思わせるほどの、早さだ。

まあしかし、ギリギリ、魔法が届く範囲にいるので文句は無い。問題は大有りだが。

「回復頼むぞ！」

アキラは遠くにいるリンに向かって、大声で叫んだ。

「気が向いたらね！」

アキラは舌打ちをし、剣を構え、ぷちスライム五体と対峙した。ぷちスライム自体、大して強くはないのだが、一人で複数を相手にするのは、やはり苦しい。

こういうとき、範囲系の特技、もしくは魔法を覚えている職業のキャラクターがいれば助かるのだが……

「まあ、そう都合よくは出てこないか」

アキラは鼻で笑って、飛び掛ってくるぷちスライムを丁寧に叩き落した。

自分から攻撃を仕掛ければ、その隙をつかれてダメージを受けて

しまう。

それ故にアキラは、普通の『ディベルティメント』の世界とは違う、この世界での『利点』を利用して、保身的な戦術を実行することにした。

普通の『ディベルティメント』の世界ではないこの世界での利点は、キャラクターの操作をマウスやキーボードではなく、己の感覚で行えることだ。

自分の肉体を動かすのと同じようにキャラクターを動かせるのは、最大の利点と言えるだろう。

アキラは運動が得意で、身体能力は並外れて良かったので、尚更だ。

また、会話の際に、わざわざキーボードを用いて文字を打つ必要がないのも、便利だ。

他のNPCとも会話を交えることが出来るのも何だか新鮮だ。

それに、何より、普通なら受けてしまう攻撃も、ここなら避けることが出来るし、普通なら出来ないような攻撃も、ここなら当然のように出来る。

『ぷちスライム×5を倒した!』

『レベルアップ! アキラはレベル3になった!』

『レベルアップ! リンはレベル3になった!』

「ぷちスライムの集団程度なら、問題はないか」

アキラとリン（主にアキラ）は、日が沈むまで、ぷちスライムたちを狩り続けた。

地道な作業の繰り返し（後書き）

『ディベルテイメント』を読んで頂き、ありがとうございます。
誤字脱字、その他ありましたら、お手数ながらご報告お願いします。

日の当たらない作業

くリスト村・宿く

さて、今日の分の経験地十金稼ぎ、加えて装備アイテムと回復アイテムの調達を終えると、アキラとリンは早速宿を取り、心身ともにへとへとで体でベッドにダイブした。

折角なので贅沢を、と言うわけで個室を二つ用意してやりたいとアキラは思ったが、生憎、装備とアイテムを揃えるのに殆ど、資金を使ってしまったので、安易に贅沢に走ることは出来なかった。

「疲れた・・・・・・・・」

痛みはないが、疲労はある。

この世界は、やはり奇妙だ。

アキラは体を大きく伸ばして、仰向けになって天井を眺め、自身とリンの状態を確認した。

『アキラ』 レベル6

職業・・・・・・・・剣士

武器・・・・・・・・旅人の剣

防具・・・・・・・・旅人の盾

特技・・・・・・・・瞑想「精神を研ぎ澄まし、急所への一撃を出しやすくする」

炎剣・焰「魔力を火に変換し、刀身に宿す。暫くの間、装備している剣の攻撃力がアップする」

『リン』 レベル6

職業・・・・・・・・白魔術師

武器・・・・・・・・旅人の杖

防具・・・・・・・・旅人の指輪

白魔術・・・・・・・・チュ「味方一人の体力を回復する」

クド「味方一人の毒を消し去る」

「まあ、これなら、ダンジョンに行っても大丈夫だろう」

パーティ内のステータスを見て、アキラは判断した。

今なら、リンだけでもぶちスライムを相手に出来るのだから、問題はあるまい。

「なあ、リン。明日から、物語進展の為の行動を起こそうと思うんだけど」

「明日やろうは馬鹿野郎って言葉を」

「それじゃあ、今からダンジョン行くか？」

「今日は眠いからやた」

まるで駄々っ子だ。

アキラはそう思ったが、口にはしなかった。

「風呂、入ってくるわ」

リンはそう言って、宿の店員から頂いた着替えとバスタオルを手に、一階にある浴場へと向かった。

「あんたはどうするの？」

部屋を出る前に、リンはそう問うた。

「ぼくは、もう暫く後からにするよ」

「そう。それじゃ、お先に」

リンは扉を閉めると、腰まで伸びた長い金髪を弾ませて、鼻唄交じりにスキップで浴場へと向かった。

「小さい物好き＋風呂好き・・・・・・・・いまいちマッチしないなあ」

アキラはそう呟き、リンの足音と鼻唄が聞こえなくなると、ベッドから体を起こし、壁に立てかけておいた剣と盾を手に、部屋を出た。

日の当たらない作業（後書き）

『ディベルテイメント』を読んで頂き、ありがとうございます。
誤字脱字、その他ありましたら、お手数ですが、ご報告お願いしま
す。

重なる疑問符（前書き）

メインイベントより、サブイベントの方が好きだったりします。
ゲームによっては、メインイベントより深く深く、練りに練り上げ
られたサブイベントが・・・。

重なる疑問符

（リスト村・夜）

アキラは武器と防具を装備したまま、夜のリスト村を徘徊していた。

今日購入したばかりの武器と防具に、体得したばかりの特技に、少々ながらも心を躍らせながら。

殆どの民家は消灯しており、リスト村には物静かでどこか寂しげな空気が流れている。

それ故に、流石に鼻唄交じりにスキップするわけにはいかない。

まあ、そんなキャラクターでもないのだが。

それでも、この世界に望んで侵入した人間である氷野晶にとって、この状況は、楽しみでしかなかったせいか、機嫌の良さそうな表情を浮かべている。

アキラはリスト村の地図を参考に村を歩き、一件の民家の前で足を止めた。

確か、リスト村で一泊すると、その夜、イベントが発生したはずだ。

アキラは一週間廃人プレイ一日目の記憶を思い出す。

流石に初日のことなのでいまいち覚えていないのだが、しかし、他の民家が消灯しているにも関わらず、この民家だけが今も尚明るいことから、場所はここで確かなはずだ。

「きゃあああああああ！」

予想的中。

アキラがそのイベントの内容を詳しく思い出していると、目の前

の民家から、女性の悲鳴が上がった。

アキラは驚くことなく躊躇うことなく、すぐさま民家の扉を開けた。

すると、その扉の向こうには、中肉中背の中年親父が、包丁を片手に、若い女を襲っていた。

「た、助けて！」

女はアキラの姿を見ると否や、アキラの元へと駆け寄って、アキラの背中に隠れた。

目の前には敵、後にはか弱き女。

なんともまあ、架空チックで素敵じゃないか。

アキラは口元を綻ばせ、咄嗟に剣と盾を構え、男と対峙した。

（ああ、そう言えば、このイベントって・・・・・・）

アキラは男の乱雑な攻撃を盾で丁寧に防ぎながら、思い出す。

確か、このイベントは、先程見たとおり、男が女に襲われているところをプレイヤーが助けるというイベントだったが――殺してはいけない。

この男を殺してはいけない。

否、殺してしまってもイベントは無事終わるのだが――殺さないほうが良い。

この男を殺さず、暫く男からの攻撃を防ぎきれば――

（そろそろかな・・・・・・）

アキラは頃合を見計らい、バックステップで男から離れた。

「ぐっ・・・・・・」

男は無駄に大きな動きをし続けたせいか、体力をあっという間に消費し、その場に跪いた。

「やるな、お前…….こうなったら！」

男はにやりと笑うと、低い声で獣のような叫び声を上げた。

そして数秒後、男の姿は、人間のものではなく、巨体の化物と化した。

(なっ…….あれで終わりのはずだぞ！)

その姿に———否、この展開に、アキラは驚いた。

アキラの記憶にあるイベント攻略では、ここは『男の攻撃を防ぎ続けると、途中で村の住人が突入してくる』はずだった。

しかし———まさかの、変化。

「きゃあああああああああ！」

男の真の姿を目にした女は、意識を失い、その場に倒れてしまった。

『ボスゴブリンが現れた！』

先程の姿よりも一回りも二周りも大きな、下っ腹の垂れた深緑色のモンスター。

汚らしい布の服に、口から垂れた汚らしい涎。

ぷちスライムと同じモンスターだとは、とても思えないし、とても思いたくない。

「ボスゴブリン、か。少し記憶と違うが……まあしかし、どちらにせよモーマンタイだろう」

（イベントが改変されている……ってことか？）

疑問に思ったが、今はそれについて深くも浅くも考えている暇はない。

アキラは女を担いで外に出ると、ボスゴブリンの雄叫びを聞きつけて外に出てきた住人に女を預け、扉をぶち破って登場したボスゴブリンと対峙した。

「よし、これで準備オーケー」

アキラは『炎剣・焰』を使用し、自身が装備する旅人の剣の刀身に炎を宿した。

これで、攻撃力は通常の場合より、幾分か増加される。レベルがまだ低いので、付加されるダメージは少ない。

しかし、普通のゴブリンの何倍もの体力を有するボスゴブリンを相手にする際には、どれだけ少ないダメージでも、欲しいところだ。

「ぐおおおおおおお！」

ボスゴブリンは威勢良く、突進してきた。

武器を持っていない為、ボスゴブリンの攻撃方法は『殴る』『蹴る』『投げる』『突進』のどれかに限られる。

何せ、ボスゴブリンは、単純馬鹿なモンスターだ。

考えることなく——否、考える前に、手を出す。

つまるところ、出来るだけ攻撃は回避し、もし回避が無理なとき

は盾で防ぎ、隙を見つけては剣で切りかかれればいい。
アキラは迫り来るボスゴブリンを避けて、ボスゴブリンの背中を切った。

「ぐおおおおおおお！」

「そい」

「ぐおおおおおおお！」

「ほれ」

「ぐおおおおおおお！」

「よいしょ」

「ぐおおおおおおお！」

「あらよつと」

「ぐおおおおおおお！」

数分経過

「ちえすと！」

「ぐおおおおおおお！」

『ボスゴブリンを倒した！』

それを繰り返し繰り返していると、とうとう、ボスゴブリンは、その場に倒れ込んだ。

パターンに嵌めてモンスターを狩ることは、そこまで珍しいことではない。

しかし、やはりと言えばやはり、達成感がまるでない。

ボスゴブリンが何かしら対策を練ってくれば多少はスリルがあって楽しめたのだろうが、しかし、ボスゴブリンには、対策はおろか、策戦を練るだけの脳みそを有してなどいない。

『レベルアップ！ アキラはレベル7になった！』

『アキラはボスゴブリンの変身セットを手に入れた！』

（・・・・・・・・こんなアイテム、あったか？）

ボスゴブリンがドロップしたのは、記憶にはないアイテム。

自分の知らないアイテム、と言うことかもしれないが――――レ
アアイテム、ということだろうか？

アキラは首を捻り、そのアイテムを袋の中に仕舞った。

（兎にも角にも、これでこの村のサブイベントは終了かな）

アキラは胸を撫で下ろすと、女を預けた民家の方へと向かった。

「その人、見て貰えませんか？」

「ええ、勿論です」

ぽっちやりしたその女性は、胸をどんと叩いて、そう答えた。

アキラはイベントを終えると、少々考え事をしながら、しかし何事もなかったかのように部屋に戻った。

重なる疑問符（後書き）

ディベルテイメントを読んで頂き、ありがとうございます。
誤字脱字、その他ありましたら、お手数ですがご報告お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4808n/>

ディベルティメント 二次元世界への侵入

2010年10月8日14時36分発行